

武田信玄の和歌をめぐる ——惠林寺の花の歌——

島内景二

はじめに

山梨県の惠林寺は、武田信玄（一五二一～一五七三）ゆかりの古刹として知られている。境内には、信玄の墓があり、それを守るようにして武田家臣団の供養塔が並んでいる。そして、少し離れたところに、信玄を敬慕すること篤かった元禄期の権力者・柳沢吉保（一六五八～一七一四）夫妻の墓もある。

惠林寺に併設されている武田信玄公宝物館には、貴重な文化財の数々が収蔵されている。その中に、武田信玄の詠んだ和歌の色紙があり、信玄の直筆であると伝えられる。この色紙を基にして建てられた歌碑も、境内（山門の傍）にある。

この色紙を、原文の表記そのままに翻刻してみる。大変に不思議な表記をしていることが、わかっていただけよう。

誘引すはくやしからましさくら花実こんころは雪のふるてら

読みやすく漢字を宛ててみよう。ついでに、濁点やルビも振っておく。

誘引すは 口惜しからまし 桜花 実来ん頃は 雪のふる寺

初句（第一句）は「誘引すは」ではなく、「誘引ずは」と「は」を清音で読みたい。「ずは」は、「もし……でないならば」という仮定条件の語法である。「ずば」と濁るのは、近世の誤りである（誤りが慣用的に通用していた）。

結句（第五句）は、「雪の降る寺」と「雪の古寺」の懸詞であるので、あえて「ふる」に漢字を宛てなかった。

この和歌色紙は、武人である武田信玄が、和歌に関しても深い教養を身につけていたこと（「文武二道」「文武両道」を体現していたこと）を感じさせるに十分

である。とても、武將の余技とは思えない。文学的に鑑賞しても、まことに魅力的な和歌である。和歌では平仮名を多く用いるのが普通なのに、「誘引」や「実」などの漢字が使われており、得も言われぬ味わいを醸し出している。

この和歌一首の魅力を存分に味読したいというのが、本稿の執筆目的である。

1 『甲陽軍鑑』から、和歌の背景を探る

江戸時代には、『甲陽軍鑑』という本が広く読まれた。武田信玄の人生を称賛しているのだが、信玄の精神を受け継いだのが徳川家康だったとされ、元禄時代に爆発的に読まれた。それでは信玄の和歌は、『甲陽軍鑑』では、どのように紹介されているのだろうか。

「品第四」の「晴信公三十一歳にて発心ありて信玄になり給ふ事」に、信玄は惠林寺の快川和尚（大通智勝国師）と長禪寺の岐秀和尚の二人を尊敬したことが書かれている。快川和尚は、一五八二年の武田氏滅亡に際し、織田軍によって惠林寺の山門が焼かれながらも、「安禅必ずしも山水を須ひず、心頭滅却すれば火自づから涼し」と唱えて入定した高僧として知られる。

信玄は、この両和尚を師と仰いでいた。そして彼らの意見を受け入れ、戦さに出陣する前には易者に占わせて、その時々々の守護神・守護仏に参詣していた。ある時、出陣前の占いの結果、惠林寺の奥にある上求寺に、戦勝祈願に参詣することとなった。

ここから、本文を引用する。引用は、佐藤正英氏校訂・訳になる『甲陽軍鑑』（ちくま学芸文庫）によるが、読みやすさを考慮して表記を一部改めた。

（信玄公は）惠林寺の奥・上求寺の不動へ御参り候ふ。二月の末にてこそ

ありつらん。惠林寺の大通智勝国師（＝快川和尚）より、使僧を立て、惠林寺へ御立ち寄りなさるべき由、申さるる。

信玄公、御返事に、「近日、出陣に候ふ間、帰陣の時分は、是非とも見廻ひいたすべき」とのことにて候ふ。

重ねて、快川和尚、仰せ越されけるは、「両袖の桜、やうやうにて、この花の下に一所構へ、待ち奉る間、御立ち寄り候へかし」と、重ねての使僧なり。

信玄公、聞こし召し、「花の、と承るに、参らぬは、野なり」とて、惠林寺へ立ち寄り給ふ。

さて国師と一礼なされ、それに料紙・硯、御座候。土屋平八郎を召して、硯を寄せ、「墨を磨り候へ」と仰せ付けられ、その後、筆と料紙を取つて、則ちあそばしける。

さそはずはくやしからましさくら花さねこん頃は雪のふる寺 源信玄

智勝国師、この歌を取りて、御覧あり。誉めて戴き、その後、短寮衆へ御渡し候へば、各々僧たち、拝見あり。尽く、則座にて和韻なさる。

言長き故、各々（の）和韻は書き申さず候ふ。国師の和韻ばかり、かくの分か、と承り及び候ふなり。

大守桜を愛す蘇玉堂 惠林もまた是れ鶴林寺 快川大通智勝国師

快川和尚が、「せっかく近くまで来たのだから、惠林寺に立ち寄ってほしい」と言ったのに対して、信玄は、「戦さが終わったら、ゆっくりとお訪ねしましょう」とやんわり断った。だが、快川和尚は諦めず、「両袖の桜がようやく見頃となりました。花の下に一席を設けて、お越しをお待ちしています。是非とも、お立ち寄りを」と、重ねて言つてよこした。

この「両袖の桜」というのは、惠林寺の開山である夢窓疎石（一二七五～一三五二）が、山門の左右（＝両袖）に二本の桜を植え、「この桜のある間は、惠林寺も長久ならむ」と言い置いたという謂われのある名桜である。

信玄は、「快川和尚が『花の』と言っているのに、訪れない人間は、野暮というものだろう」と言つて、惠林寺に立ち寄った。そこで詠んだのが、「さそはずはくやしからまし……」の和歌であった。僧たちも漢詩で返答したが、快川和尚の作品だけが、『甲陽軍鑑』には書き記されている。

信玄が口にした「花の」という言葉は、「花の下で宴会をしよう」の意味（「のは連体格）であるとも、「花が咲いた」あるいは「花が私を待っている」の意味（「の

は主格）とも、解釈できる。

佐藤正英氏の訳文では、信玄の和歌の意味は、

お誘いがなかったならさぞ心残りであつたらう。やつてこなければ桜花は雪の降るように散りすぎていたであらうから

と、なっている。

この訳で十分なのだが、「雪の降るように散りすぎている」の箇所が、「目の前で、花が雪のように散っている」という存続を表しているのか、「既に、花が雪のように散ってしまった」という完了を表しているのか、いささかはつきりしない。実は、両様に解釈できるのがこの和歌であつて、佐藤氏は苦心の訳を付けているのだ。

ちくま学芸文庫の『甲陽軍鑑』本文は、「さそはずはくやしからましさくら花さねこん頃は雪のふる寺」というように、平仮名の多い表記である。「誘引」[さそは]「実」という漢字が使っていないので、音韻的に「さ」の頭韻が作者に意識されていることが、一目瞭然である。信玄の和歌は、実にリズムカルであつた。にもかかわらず、あえて「誘引」や「実」という、ゴツゴツした漢字が使われている。何かしらの表現意図があつたと、考えるべきであらう。

すなわち、この和歌の眼目は、自筆色紙の表記からわかるように、「誘引」および「実」という特異な漢字を使う点にあつたと考えられる。その理由を、探つてみたい。

2 なぜ「誘引」なのか？

「誘はずはく惜しからまし」。直訳すれば、「誘わなかったならば、どんなに残念だったことだろうか」という意味。意識すれば、「誘われなかったならば、どんなに残念だったことだろうか」となる。受身形の方が、日本語としては自然である。

「口惜し」と思うのは、むろん信玄である。では、誰が「誘ふ」のか。佐藤正英氏の訳に「お誘いがなかったのならば」とあるように、誘つたのは惠林寺の快川和尚である。

だから直訳としては、「快川和尚が誘わなかったのなら、私（＝信玄）はどんなに残念だったことだろうか」という意味になる。

しかし、「さそはずは」の箇所が、信玄の白筆色紙では「誘引ずは」と表記してある。この「誘引ずは」は、和歌の言葉づかいとしては、はなはだ珍しい。

だから、「誘引」という漢字表記をしなければならぬ必然性があった、と考へるべきだろう。『甲陽軍鑑』の記述によれば、信玄は待たれに待たれて、やっと到着した恵林寺で、和尚と黙礼した後、言葉を交わす前に筆を取って、いきなり「誘引」という漢字二文字を色紙に書きしたためた。

その必然性は、この和歌が『和漢朗詠集』を踏まえていることを明示するためだったと思われる。『和漢朗詠集』の「鶯」の項に、白楽天の「春江」という詩の一節が載っている。

鶯の声に誘引せられて 花の下に来る
草の色に拘留せられて 水の辺に坐す

快川和尚は信玄を再度招くに当たって、「この花の下に一所構へ、待ち奉る」と使いの僧に告げさせた。この「花の下に」という言葉を聞いて、信玄は深く感じるものがあった。なぜなら、「花の下に」という言葉から、『和漢朗詠集』の「花の下に来る」という漢詩句を連想したからである。

そして、その「花の下に来る」の上に位置する表現である「鶯の声に誘引せられて」を、信玄は強く意識した。「ここに美しい花が咲いていますよ」と、白楽天を誘った鶯の声。それを、「ここには綺麗な花が咲いていますよ」と、信玄を誘った快川和尚に喩えて、心から面白く思ったのである。

この時、信玄の脳裏において和歌の構想が生まれ、それをどうしても快川和尚に披露したくなり、戦さに向かう直前でありながら、わざわざ恵林寺に立ち寄ったのではなかったか。

「鶯＝快川和尚」、「白楽天＝武田信玄」という見立てである。

「誘引ずは」は、「あの白楽天を花の下まで導いたという鶯の声のように、貴僧が私を恵林寺の花の下へとお誘いくださいさらなかったのなら」というのが、正確な意味になる。

さて、この『和漢朗詠集』の漢詩であるが、『源氏物語』の竹河巻でも引用さ

れている。薫が、玉鬘と語り合う場面に、

「今宵は、なほ鶯にも誘はれ給へ」

という玉鬘の言葉がある。『源氏物語』の主要な古注釈書は、すべて『和漢朗詠集』の引用であると指摘している。その通りだろう。なお『河海抄』は、『和漢朗詠集』に加えて、『古今和歌集』の、

花の香を風の便りにたくへては鶯誘ふしるべにはやる（紀友則）

の引歌であるとしている。ただし、『岷江入楚』の「箋」（＝『山下水』）が述べているように、「引歌に及ばず」（＝竹河巻に『古今和歌集』の和歌が引用されていると考へる必要はない）とするのが、妥当である。

『古今和歌集』の紀友則の和歌では、花の香りに鶯が誘われている。それに対して、『和漢朗詠集』や『源氏物語』では、鶯が人を花の下へと誘っているのである。この『河海抄』の指摘は、不要であろう。

ともあれ、「誘引」という語句を含む漢詩が、『源氏物語』にも引用されていること、そこでは「誘引」を「誘ふ」という動詞で言い換えていること、などが判明した。

武田信玄は、『和漢朗詠集』を学んでいたとみえ、白楽天の「春江」の詩に通じていた。なおかつ、『源氏物語』も通読したことがあり、竹河巻（正篇と宇治十帖をつなぐ部分にあるから、物語のかなり後ろの方に位置する）に、『和漢朗詠集』を引用した表現があることも知っていただろう。

ただし、「誘引ずは……」の和歌に「源信玄」と記した事実をもって、信玄が自分自身を光源氏になぞらえた、とまでは言えない。武田氏は、「新羅三郎」と称された源義光（「八幡太郎」こと源義家の弟）を祖とする清和源氏の名門である。和歌においては、「源」「藤原」などと、本姓を名告るのが礼儀である。

尤も、室町時代には清和源氏の名門である足利将軍に『源氏物語』の写本や注釈書が献上される際には、光源氏と清和源氏の類同性が意識されていたし、江戸時代の徳川将軍家も清和源氏の名門である新田氏の分家を称していたので、将軍を光源氏に喩えることはあった。

信玄が『源氏物語』に通じていたのは、彼が和歌や漢詩や禅に秀でていたこと

と同じく、「文武二道・文武両道」を目指した努力のたまものである。話題を、「誘引」に戻す。白楽天の詩が、『源氏物語』に引用されていることは、既に説明した。それでは、和歌史的にはどのように、「誘引」は詠まれてきたのだろうか。実に多くの和歌が、この漢詩を詠み込んでいることに驚かされる。

① 『千里集』・大江千里

鶯の鳴きつる声に誘はれて花の下もとにぞ我は来にける

② 『拾玉集』・慈円

うち返し鶯誘ふ身とならむ今宵は花の下に宿りて

③ 『拾遺愚草員外』・藤原定家

衣手に乱れて落つる花のえや誘はれ来つる鶯の声

④ 『土御門院御集』・土御門院

鶯の誘ふ山辺にあくがれて花の心こころにうつる比ひかな

これより後の時代の和歌の引用は省略するが、武田信玄以後の江戸時代の歌人たちも、「鶯の声に誘引せられて花の下に来る」の漢詩句を、和歌に組み換えて詠み続けている。

さらに注目されるのは、室町時代の家集の詞書ことばがきで、「誘引」という語が使われるときには、自分の高い人の招待を受けるというニュアンスであることだ。ただしこういう場面では、「鶯の声に誘引せられて」という漢詩の引用はない。

正広の『松下集』には、「昔、老僧、古、仏地院長算、誘引ありて、この寺へ参り」という詞書がある。正広が、かつて仏地院の長算から「誘引」されて、この寺に来たことがあった、という回想である。細川幽斎の『衆妙集』にも、「近江中納言、鞍馬寺へ人々誘引ありて、花見給ふに」という詞書が見える。

これらの詞書における「誘引」の用法が、信玄と快川和尚の場合と一致している。自分の高い人が、お寺の「花見」に人々を「誘引」するのである。

以上をまとめると、「誘引」には、『和漢朗詠集』の漢詩句の伝統と、目上の立場の人からの誘い（多くは寺院関係）という使い方があった。信玄は、その二つの「誘引」の語法を融合させるようにして、「快川和尚からの誘い」と「鶯からの花の下への誘い」とを、「誘引ずは」という初句で詠み込んだ。

快川和尚も、一座の僧たちも、信玄が『和漢朗詠集』の詩句を巧みに引用した

ことを、すぐに察知したであろう。そして、「ほかならぬ貴僧のお誘いなら、断れませんでした」という丁寧な挨拶（目上の人に対する謙遜）であることも、読み取ったであろう。それが、信玄の教養に対する一座の人々の尊敬の念につながってゆく。

3 反実仮想の語法

次に、初句から第二句にかけての文脈を、たどってみよう。

誘引さそはずは口惜くくやしからまし

「口惜し」は「くちをし」とも「くやし」とも発音するが、「くちをし」は自分の力ではどうにもできない成り行きを見守らざるを得ない無念の思い、「くやし」は自分自身の取った行動に対する後悔の念を表す。

この和歌は「くやし」だから（「くちをし」だと字余りになってしまふ）、「もしも自分の判断ミスで、今日この恵林寺に来なかったのであれば、どんなに自分の過失を後悔したことだろうか。この場に來られてすばらしい花を見ることができ、後悔せずに済んだので、本当に良かった」というニュアンスである。

さて、「ずは」は仮定条件だが、下に「まし」があるので、「ましかば……まし」と同じ反実仮想の語法となる。「もしも、……でなかったのならば、どんなにか……だったであろうに。実際には、……であったので、……だった」というニュアンス。

この「ずは……まし」の語法は、和歌では無数に詠まれているが、第三句に「桜花」、そして第五句に「雪」が位置するので、読者にはある特定の和歌が強く連想されるようになっていく。本歌があったのだ。信玄は、漢詩の「誘引」だけでは一首の和歌が完成できないことを知っていた。

それは、『伊勢物語』の第十七段である。本文を記しておく。

年頃としごろ訪れざりける人の、桜の盛りに見に來きたりければ、あるじ、
あだなりと名にこそ立てれば桜花年まねに稀まなる人も待ちけり

返し

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

信玄は、『和漢朗詠集』だけではなく、明らかにこの『伊勢物語』の和歌も引用していると考えられる。おそらく、『古今和歌集』『源氏物語』『伊勢物語』の三つが、彼の教養の中で、「古典」として高く位置づけられていたのだろう。信玄はふだんから、これら三つの古典文学の学習に励んだものと思われる。

ところで、武田信玄を愛した現代作家である新田次郎に、『武田三代』という短編集がある（文春文庫）。その中に、「消えた伊勢物語」という作品がある。藤原定家自筆の『伊勢物語』をめぐる歴史ミステリーである。都の文化に対する憧れの強かった今川義元が入手し、彼の死後、それを今川氏康から信玄が借用していた、それが盗まれてしまった、という設定である。

新田次郎は、信玄が和歌を深く嗜んでおり、『伊勢物語』にも造詣が深かったと書いている。新田の推測は、おそらく正しいだろう。

深く『伊勢物語』を読み込んでいるからこそ、満開の花の下に立った時、自然と「今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし……」という『伊勢物語』の和歌が、信玄の口をついて出てきたのだ。いや、正確には、この『伊勢物語』の第十七段の和歌を想起し得たからこそ、「誘引」で始まる桜賛歌が信玄の胸中で完成し、恵林寺に足を運ぶ気持ちになったのである。

『伊勢物語』の和歌は、「今日、来なかつたならば、この満開の桜も、明日には雪のように散ってしまつていたことであろう。もし散つた無数の花びらが地上に残っていたとしても、もはやそれを花と見ることはないであろう。季節はずれの雪としか見えないだろう」という意味になる。

信玄の和歌の「実ころは雪のふる寺」は、この『伊勢物語』第十七段を踏まえて解釈すべきである。だから「雪」は冬に降る本物の雪ではなく、「落花」の比喩ということになる。

必然的に、「実ころ頃」は、満開から間もない頃、すなわち「明日」という意味にならざるを得ない。『伊勢物語』第十七段に、「明日は雪とぞ降りなまし」とあるからである。

4 「桜花」の前後

第三句「桜花」については、取り立てて解釈上の問題はない。

信玄が快川和尚から「花見」を誘引され、その「花の下」に来た。その場の中心である「桜花」を、「五七五七七」の和歌の中心である第三句にしつかり詠み込んでいたのである。

この「桜花」という要の言葉は、前方にもかかるし、後方にも続いてゆく。まず、第一句・第二句との続き具合では、「誘引すはくやしからまし」という初句・第二句との関連で、「この桜花の下に誘引せられなかつたら、どんなにか自分はいかしくなつただろう」という意味になっている。

それだけでなく、第三句「実ころ」の「実」とも密接につながってゆく。信玄自筆とされる色紙では、「さくら花実ころ」というように、「花実」が連続する漢字として表記されている。

「花実」は、歌論（和歌に関する評論）の世界では、外觀と内容、表現と思想をそれぞれ表すものとして、一對のものとされてきた。この「花実」を両方共に備えているのだ。

何が、花実を兼備しているのだろうか。まず、恵林寺という名刹が、快川和尚という名僧を得て花実兼備している。そして、武田信玄もまた、「文武二道・文武両道」を兼備した、花も実もある武人なのだ。

「誘引すは……」という和歌は、花見の席に招いてくれた快川和尚への挨拶であると同時に、戦陣に臨む直前でありながら花見をするだけの心の余裕を持った自分の度量の大きさを信玄が自画自賛する性格のものでもあつたらう。

このように、信玄の和歌は、「花実」という二つの漢字の連続にも、大きな意味が隠されていた。だから、初句から第三句までの「誘引すはくやしからましくら花」という十七字が、「実」という漢字を導き出すための「序詞」の機能を果たしているとも言える。

なおかつ、「桜の花」が散つた後に「実が生る」という含意もあるだろう。

このように、信玄の和歌の第三句「桜花」には、大変に複雑な創作意図が込められている。しかしここで「桜花」と歌つたことから、新たに催馬楽「桜人」の歌詞が信玄に連想され、その催馬楽を引用している『源氏物語』の薄雲巻が浮上してくる。

信玄の『源氏物語』への深い傾斜が、うかがわれる箇所である。

5 「実こんころは」と『源氏物語』

さて、第四句の「実こんころは」である。「さねこんころは」と読む。大変に珍しい表記である。「誘引」がそうであったように、信玄はどうしてもここで「実」という漢字を使ったかったのではないか。その理由の一つは、既に見たように「花実」という熟語を浮かび上がらせるためである。もう一つは、信玄の古典文学に関する深い教養を強調するためである。

まず、漢字表記の謎を解明する以前に、「さねこん」という言葉自体の意味から先に考えよう。この珍しい言葉の典拠は、催馬楽の「桜人」である。

桜人 その舟止め 鳥つ田を 十町つくれる 見て帰り来んや そよや 明日帰り来む そよや
 言をこそ 明日とも言はめ 彼方に 妻去る夫は 明日もさね来じや そよや
 さ明日もさね来じや そよや

男と女、たぶん夫と妻の掛合の歌である。男が舟に乗って、「私は鳥の田を見回ってくるだけだ。明日には、戻ってこよう」と、女に言い訳をする。これから男が向かう島には、たぶん桜のように美しい愛人が住んでいるのだろう。

女は、男に向かつて、「あなたは言葉では、『明日にも帰ってこよう』と言っているけれども、島の女に未練が残って、きつと明日になっても帰ってこないでしようよ」と言い返す。

「さね来じや」の「さね」について、「奈良時代には下に打消の語を伴い、少しも、決して、の意」と説明されることがある（小学館・日本古典文学全集などの説）。

むろん、信玄は「さねこん」という言葉が「桜人」という催馬楽に典拠をもつことを、知っていた。だからこそ、「桜花」を一緒に愛でようという快川和尚の言葉から、「桜花 ↓ 桜人 ↓ さね来じ」という連想が働いて、「実こんころは」という言葉続きの和歌を詠んだのである。

ただし、催馬楽からだけでは、信玄の和歌は生まれえない。言葉の直接の典拠は催馬楽ではあるが、「実こんころ」には、催馬楽とは別の間接的な典拠があると考えべきだろう。「さねこん」と「さねこじ」との間には、大きな距離があるからである。

そこで思い出されるのは、『源氏物語』の薄雲巻である。光源氏の永遠の憧れであった藤壺が逝去する、とても重要な巻である。『源氏物語』を一読した読者ならば、決して忘れられない印象を残す。

ただし、この薄雲巻には、藤壺と関わらない記述も見られる。光源氏は、かつて明石に蟄居中に、明石の君という女性と契って、女児に恵まれた。明石の君とその姫君は、光源氏の要請に応じて、明石から上京してきた。洛西の大堰に住んでいる明石の君を、光源氏はたびたび訪れ、紫の上から嫉妬される。既に、明石の君と光源氏の間にも生まれた姫君は、紫の上に引き取られ養女として育てられている。

この状況が、『甲陽軍鑑』の伝える「誘引ずは……」の和歌の詠まれた成立事情と似ているのは確かだろう。和泉定広氏「信玄の『さそはすは』の歌について」(『武田氏研究』一号・一九八八年二月)に、指摘のある通りである。ただし、和泉氏は催馬楽にも『伊勢物語』にも全く言及していない。

「上求寺＝明石の君」、「恵林寺＝紫の上」、「信玄＝光源氏」。快川和尚は信玄に向かつて、「恵林寺に立ち寄りず、上求寺へだけ参詣するのは、ひどいじゃないですか」と、戯れている。むろん、快川和尚には『源氏物語』の薄雲巻の内容は念頭になかっただろう。二度にわたって快川和尚から恵林寺に立ち寄るように言われた信玄の心の中で、「これじゃまるで自分は、薄雲巻の光源氏のような板挟みの立場じゃないか」という感興が湧いてきたのだろう。

それが、紫の上に対して、すぐに、そして必ず帰ってくるからね、と約束する光源氏の和歌を連想させたのである。以上を念頭に置いて、薄雲巻の紫の上と光源氏との和歌の贈答を読んでみよう。

(紫の上) 舟止むる彼方人のなくはこそ明日帰りこむ夫とこそそみめ
 (光源氏) 行きてみて明日もさねこなかなかに彼方人は心置くとも

信玄の和歌の「さねこんころ」の「さねこん」という言葉が、ここに発見できる。ちなみに、光源氏と紫の上の和歌の贈答の直前には、「明日帰り来む」という催馬楽「桜人」の一部分が、光源氏によって口ずさまれている。

「舟」が、光源氏。「桜人」が桜のように美しい女性で、ここでは明石の君。紫の上は、大堰には明石の君という「桜のように美しい女性」がいないのであれば、あなたという夫は、明日必ず(本当に)帰ってくると思えるのですがね、お

そらくあちらには綺麗な人がいるので、あなたが明日にも帰ってくるのは無理でしょうね、と皮肉っている。

それに対して光源氏は、「私は明日、必ず（本当に）帰ってくるからね。絶対に約束する。たとえ、先方の女性が気を悪くしたとしてもさ」と返事した。

「さねこん」は、「必ず（本当に）帰ってくるつもりだ」の意味で使われている。「打消」の用法ではない。おそらく、平安時代には、「さね…打消」という用法が忘れられて、「まことに、本当に」を広く意味する副詞となったのだろう。

それでは、薄雲巻の「さねこん」という言葉は、どのように解釈されてきたのだろうか。『源氏物語』の古注釈書を、振り返っておこう。

鎌倉時代の『紫明抄』では、「せな」に「夫」、「さねこん」に「早来」という漢字を宛てている。「さね」を「早く」という意味に解釈しているのである。

室町時代初期に書かれた四辻善成の『河海抄』では、少し詳しい。「さね」には、二つの意味があると書いてある。

早来也。はやくこん也。

又云く、実来也。まことにこんと也。伊勢物語にも、つかひさねとある人といへり。まことある人と云ふ心也。

「さね」には、「早く」という意味と「まことに」という意味との二つの説がある、と両説が併記されている。ただし、「早く」の方が先に書いてあるので、こちらが有力だったことがわかる。だが、少数説の「まことに」の根拠が『伊勢物語』であるとされているのが、重要である。なぜなら、信玄はこのほか『伊勢物語』に対する愛着が強かったからである。

室町時代中期の一条兼良の『花鳥余情』は、「明日もさねこん」の意味を、「あすはやくかへりこんといふころなり」と解釈している。やはり、「さね＝早く」説である。

以上の三つの注釈書から、何が言えるだろうか。

『源氏物語』の薄雲巻には、信玄の和歌と同じ「さねこん」という言葉が和歌に詠まれている。ただし、「さねこん」の解釈としては「早く帰ってくる」説が有力で、「まことに（本当に）帰ってくる」説は少数説である、ということだ。

ちなみに現在では、当時の少数説が逆転して多数説となり、「本当に帰って

る」というふう解釈されている。

このような『源氏物語』の通釈史・解釈史を踏まえて、薄雲巻の本文を見ても。信玄の和歌が、「さねこんころ」という言葉に「実こんころ」という表記を宛てている点に注目したい。

信玄は、当時として有力だった「早く帰ってくる」説を採用していないのである。現在と同じ解釈（当時としては少数説）である「本当に帰ってくる」説に立脚している。「まことに＝真実に」という意味で「さね」を理解していたからこそ、「実こんころ」と表記したのである。

そして、信玄が「本当に帰ってくる」と理解している日時（光源氏が大堰の明石の君のもとから都の紫の上のもとに戻ってくる日時）が、催馬楽「桜人」によって、「明日」であることが判明する。

信玄は、「今日、恵林寺に来られなかったとしても、明日には実際にやって来るつもりでしたが」と言っているのである。「さね＝まことに」であったとしても、本歌に「明日もさねこん」とあるがゆえに、「さねこん」には「明日」という意味が付着し、結果的に「早く来る」というニュアンスが生まれたのだ。

「さね」からではなく、「明日も」の部分から「早く」という意味が発生してくるのだ。そのところを、『源氏物語』の古注釈書は見誤ったのだろう。

6 「実こんころ」は、結果的に「明日」の意味

『源氏物語』の薄雲巻で、光源氏は「明日もさね来ん」と歌っていた。『新編国歌大観』を検索してみると、この『源氏物語』の場面を本歌取りした和歌が何首か発見できる。

① 『長綱集』・藤原長綱（鎌倉中期の歌人）

「あすはさねこむ」と申したる人に

明日まではいさともいさや今の間もなほ頼まれぬ身をぞ疑ふ

② 『雪玉集』・三条西実隆

立ち帰り明日もさねこむ夕涼みあかずもあるかな川面の里

③ 『掬白集』・木下長嘯子

玄旨法印（＝細川幽斎）を悼める言葉

惜しきかな惜しくやはあらぬ立ち帰り明日はさねこむ人の別れも

④ 『賀茂翁集』・賀茂真淵

春道がなり所に、友だち、かい連ね行きて

あかなくに明日もさねこむには鳥の葛飾小田の苗も見がてら

信玄の歌が読まれた時期は、②と③の用例の間に位置する。だから、信玄が「さねこん」という『源氏物語』の本歌取りを試みたのは、かなり古い用例だと言つてよい。しかも、三条西実隆は、信玄よりも先であるが、『雪玉集』の成立は江戸時代である。だから、これらの「明日はさねこん」の実例を、信玄は知らなかったということも、大いに考えられる。もしかしたら、信玄の正室（三条夫人）が三条西家と信玄を結びつけた可能性は残る。

それを考慮したうえで、これらの四例を眺めてみれば、「明日もさねこん」で一まとまりになっていることが明らかである。それが、信玄の和歌における「さねこん」の意味（明日という日時）を強く規定している。

信玄の和歌を、もう一度引用する。

誘引ずはくやしからましさくら花実こんころは雪のふるてら

「実こんころ」とは、「私が実際に（まことに）ここに来るであろう頃」の意味であるが、具体的には「明日」だったのである。

ところで、「ずは……まし」の反実仮想の語法に言及した際に、信玄が『伊勢物語』第十七段の和歌を意識していたことを明らかにしておいた。

今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

ここにも、「明日」とあった。さらに、催馬楽「桜人」の「明日もさね来じ」が、だめ押しする。

信玄は、「このように満開の恵林寺の両袖の桜の花も、今日、誘引されて訪ねてこなかったならば、明日にも自分はここに実際に来るつもりではあったが、その明日には『雪』のように散り乱れていて、地上の落花は雪としか見えず、とても花とは見えなかったことだろう。ああ、花が枝に咲いている今日のうちにここに来て本当に良かった。お誘い、ありがとうございました。心から感謝します」と、

快川和尚に挨拶しているのである。

くだいけれども、「実こんころ」は、具体的には「明日になれば」「明日は」の意味と解釈すべきだろう。今日、この場で「両袖の桜」を見なかったならば、明日来たとしても、さぞかし雪のように散りしきっていることであろう、と言う意味である。

ちなみに、「さね実」を含まない「こむころ」の用例を挙げておく。

① 『秋篠月清集』・藤原良経

忘るなよ秋はいなばの山の端にまた来むころをまつの下陰

② 『後鳥羽院御集』・後鳥羽院

月影もまた来むころを頼むなりいなばの山の秋の初風

作者は二人とも『新古今和歌集』を代表する歌人であり、同時代人である。この二首は、大変によく似ているので、直接の影響関係があると考えてよからう。共に百人一首で有名な、「立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば今帰り来む」（在原行平）の本歌取りであり、どちらも秋（男が女に「厭き」て、恋の終わる季節）の歌であり、自分のもとを去った男の来訪を待つ女の立場で詠まれている。

ちなみに、「国歌大観」によれば、「またこむ」と「またこん」は合わせて七十四例に上っているが、信玄の和歌との関連で特に注目される用例はなかった。ところが、「さねこん」では用例があり、「こんころ」でも用例はあるが、「さねこんころ」という用例は見つからない。だから、「実こんころ」という信玄の和歌の言葉は、大変に特殊である。長い和歌史上で一回切りである。

普通の（凡庸な）歌人ならば、『源氏物語』薄雲巻の本歌取りだけで終わってしまうところであるが、信玄は『伊勢物語』をベースにした古典観・和歌観を確立していた。しかもそのベースのうえに、『和漢朗詠集』や『源氏物語』を加味して一首の和歌を完成させるほどの力量をもった本格的な歌人であった。

最後に、江戸時代の俳諧での「さねこん」の用例を概観しておこう。

「桃のさねこん事は念なや」「からす瓜のさねこんといふ頃も過ぎて」「花の後も桃の実こん木陰かな」の三例が見つかった。

すべて、「実果実」と「さねこん」の懸詞である。なおかつ、『源氏物語』薄雲巻の本歌取りだと思われる。

7 「さね」実」と『伊勢物語』

では、なぜ信玄は、「さね」に「実」という漢字を宛てることにこだわったのだろうか。そして、なぜ信玄は、薄雲巻の解釈では少数派である「さね」まこと（実）説を採用したのだろうか。

それが、先ほど引用した『河海抄』の書き方から見えてくる。「さね」実」説の根拠は、『伊勢物語』だったのだ。信玄は、『伊勢物語』をことのほか愛好していた。だから、『伊勢物語』の第十七段の「今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」という和歌の構文を利用して、「誘引ずはくやしからまし」という和歌を詠んだのである。

信玄の和歌は、『伊勢物語』の第十七段によって骨格が形成されており、そのうえに『源氏物語』薄雲巻の引用による肉付けが行われた。

それでは、「さね」実」説は、『伊勢物語』のどこに書いてあるのか。『河海抄』には、「つかひさね」とあった。これは、『伊勢物語』の第六十九段に見られる言葉である。

在原業平は、「狩の使」の正使として伊勢神宮に遣わされた。それを、伊勢斎宮（恬子内親王）がもてなしているうちに、二人は「わりない仲」となった。斎宮が業平を歓待したのは、業平が「使ひさねとある人」だったからである。

現在の『伊勢物語』研究では、「さね」は「あるものの中の主となる存在」の意味とされ、「使ひの中の主立ったもの」正使」と解釈されている。『河海抄』が述べていたような「まこととある人」という解釈は、『伊勢物語』の研究史上、本当にあったのだろうか。

それでは、『伊勢物語』の第六十九段の注釈史・解釈史を辿っておこう。最古の注釈書である『島原文庫本・和歌知頭集』では、「さねとあるつかひ」とあるので、「正使」説だと思われる。

『冷泉家流伊勢物語抄』では、「よき使」の意味だとされる。「さねとは、器量なり」ともあるので、器量の良い使い、という説である。

一条兼良の『愚見抄』では、「さね」は「器」で、勅使を勤める器の意。

宗祇の説を伝える宗長の『宗長問書』では、「器量」。

細川幽斎の『闕疑抄』には、「つかひさね」勅使」とあるが、「さね」の語義の解説はない。

ところで実は、もう一箇所、『伊勢物語』で「さね・さね」という言葉が使われている段がある。第百一段。在原業平の異母兄である行平の家に、お酒を飲むために客たちが集まってきた。その中では「上にありける」（宮中の殿上の間に仕出している）左中弁・藤原良近を「まらうとさね」にして宴会を開いたのだった。「まらうとさね」の「まらうと」は客人の意。「さね」は、現在の語釈では「主たる存在」の意味だから、「まらうとさね」は「主客・主賓」という意味になる。

『冷泉家流伊勢物語抄』は、「よきまらうと」。

『彰考館本・伊勢物語抄』は、「まことしきまらうと」。

『愚見抄』は、「客人の器」。

『宗長問書』は、「今日の客人の本人」。

『闕疑抄』は、「客人の器」。

「器量」ないし「器」説が有力であるが、『冷泉家流伊勢物語抄』に「よき」という説があり、『彰考館本・伊勢物語抄』は「まことしき」という説を載せている。名詞の「実」を形容詞にすれば、「まことしき」。「まこと」も「さねさね」も、漢字で書けば「実」であり、同じ意味になる。「まことしき」は、真実である、正しい、本格的である、という意味である。正しい勅使は、立派な人だから「使ひさね」は「よき使ひ」であり、「客人さね」は「よき客人」ということになる。以上を総括すると、『河海抄』が紹介していたような、「まこととある人」として「使ひさね」を解釈した『伊勢物語』の第六十九段の注釈は、まだ私の視野に入っていない。未発見である。だが、それに類する「よき」「まことしき」説ならば、第百一段の注釈の中に確かに存在していることがわかる。恵林寺の花見に招かれた信玄は、文字通りの「まらうとさね」である。

ここで、もう一つ気になる言葉が『伊勢物語』にある。第十段の「むこがね」である。現在では、「お婿さん候補」の意味だと解釈されている。この「がね」と「さね」が、日本語としては大変に似通っている。

『書陵部本・伊勢知頭集』は、「むこになりぬべき器量也」。

『冷泉家流伊勢物語抄』は、「むこの器量」説と、「初めて女のもとに婿として出かける時に鉄漿を付ける」説を併記。

『愚見抄』は、「器量」。第百一段の「まらうとさね」を「まらうとがね」とし、たうえで、同じ「がね」だと説明。

『肖聞抄』は、「器量」。

『宗長問書』も、「器量」。

『闕疑抄』も、「器量」。

結局、『伊勢物語』の注釈史においては、「さね・ざね」と「がね」は同じ意味で、どちらも「器量」の意味とされることがほとんどだったことがわかる。「ある地位（勅使とか婿とか客人とか）にふさわしい器量」という意味であり、「よい器量」「まことしき器量」という意味であると、「使ひざね」「客人ざね」「婿がね」などの言葉は理解されてきた。

まとめると、「さね・ざね」と「がね」いう二つの言葉は、共に「器」や「器量」であるという解釈が、中世を通して広くなされてきたのである。

ここで、一つの類推が可能となる。

信玄が「実こんころは」と歌った真意は、「実際に私が、明日ここに来たとしても、その頃には」という意味だった。すなわち、「さね」に「まこと」に「だ」だった。

ただし、和歌では「縁語」や「懸詞」を駆使するという言葉遊びの要素が強いので、「花実」という歌論で話題となることの多い「実」を懸詞として際立たせるために、「さね」を「実」という漢字で表記して、強調した。また、「花」と「実」は、植物に関係の深い「縁語」である。

ここまでは、本稿の第4章で、既に述べた通りである。

「実こんさねこん」という言葉自体は、催馬楽「桜人」に起源を発し、『源氏物語』薄雲巻を経由して、信玄の語彙に追加された。

ただし、「ざね・さね」に関しては、『源氏物語』以上に信玄が愛読していたと思われる『伊勢物語』に「使ひざね」「客人ざね」「婿がね」という言葉があり、こちらも古くから信玄の語彙の中に存在していた。

『伊勢物語』の「ざね」（「がね」）は、「勅使」「客人」「婿」などといった存在に「まこと」になりうる器量の持ち主」という意味で、解釈されてきた。正しい勅使、実らしい勅使、正しい客人、本物の客人、客人らしい客人、婿たるにふさわしい婿などという具合にである。

きっと、信玄が見ていた『伊勢物語』の本文あるいは注釈書に、「ざね」や「さね」、あるいは「がね」を、「実」という漢字で表記したものがあつたのだろう。それを読んで知っていたから、信玄が「実こんころ」という表記を採用したのだと、私は推測したい。そう考えることによって、『伊勢物語』によって「誘引ず

は……」の和歌の骨格が形成されたという私見に、一層の説得力が出てくるだろう。例えば、江戸時代の後水尾天皇が講じた『伊勢物語御抄』では、第十段の「むこがね」について、「婿の器量也」としたあとで、「『実』の字を、『がね』と読む也」と注している。ちなみに、同書は「ざね」に関しては「器量」という漢字と共に「真」という漢字を宛てている。「まらうとざね」には、「正客」と「客真」という漢字を宛てている。

また、江戸時代初期の成立と想像される『伊勢物語抄』（奈良女子大学図書館蔵）では、「むこがね」に関しては「『実』の字也」「つかひざね」に関しては「『実』也」「真也」と解説している。

『伊勢物語』の本文を漢字ばかりで表記した『伊勢物語・真名本』や『古本・伊勢物語』などでは、「真」という漢字を「ざね」に宛てている。「ざね」と「がね」とが『伊勢物語』の注釈書では同じ意味だったように、「真」と「実」も同じ意味だとして互いに流用されている。

以上の探索によって、信玄の和歌の「実」という漢字表記は、『伊勢物語』の「ざね・さね・がね」という言葉が彼の脳裏にこびりついていたからだ、私は結論したい。それほど、信玄にとつての『伊勢物語』の意味は大きかった。

8 国守の器量

『伊勢物語』における「ざね」は、漢字で書けば「実」（または「真」）であり、その意味は「器量」であると理解されてきた。現在の信玄は、甲斐国の国守である。だが、これから数か国の国守へと成長し、もしかしたら日本という国全体の主となるかもしれない。

それだけの「器量」が、信玄にはある。光源氏が、准太上天皇として国を保つだけの器量を持っていたのと同じように。

信玄が「さねこんころ」の「さね」の部分に、「実」という漢字表記を採用した瞬間に、「花実」という言葉統きの妙だけでなく、「信玄の国守としての大きな器量」という意味までが新たに発生したのではないだろうか。

『甲陽軍鑑』では、快川和尚が、信玄の和歌に唱和して読んだ漢詩は、次のようなものだった。

大守桜を愛す蘇玉堂 恵林もまた是れ鶴林寺

ここに、「大守」とある。むろん、「領主・大名」という意味である。戦陣に臨む直前にあっても、桜を愛する器量があつてこそ、信玄は「大守」としての真実の器量の持ち主ということが明らかとなるのだ。

「よき大守」、「まことしき大守」である。信玄が「真実の大守」へと成長する日が、明日にでも本当に来る（＝明日はさねこん）ことを、信玄本人だけでなく、彼の精神的指導者である快川和尚もまた心から期待している。

信玄が持つて生まれた「器量」の大きさを信じ、それを磨くのが快川和尚の役割であり、『伊勢物語』や『源氏物語』や『古今和歌集』の教養の力でもあったのだ。

9 雪のふる寺

第五句の「雪のふる寺」という体言止めを考えよう。類例と比較してみる。

① 『松下集』・正広

古寺夕雪

うち払ふ袖に夕べはあらはれて墨染うすき雪のふる寺

② 『雪玉集』・三条西実隆

古寺雪

櫛つむ袖も氷の山深き道は幾重の雪のふる寺

③ 『逍遙集』・松永貞徳

古寺雪

天人の手ぶさにもしや汚るべき花たてまつる雪のふる寺

④ 『新明題和歌集』・宣勝

古寺雪

積もりぬる尾上の雪のふる寺をありと知らせて鐘響くなり

⑤ 『鈴屋集』・本居宣長

古寺雪

山奥に行ふ道や絶えざらむ鐘の音する雪のふる寺

信玄よりもはるかに後の江戸時代までの用例を含めて引用したが、「雪のふる寺」はすべて冬の雪景色である。つまり、「雪」は天体現象としての冬の「雪」であつて、「落花」の見立てではない。信玄が、落花を雪に喩えているのは、まことに斬新である。

信玄は、「戦さを終えて、ここに実際に来るのは冬になっていて、桜の花ならぬ、雪が空から降っていることでしよう」と歌っているのではない。「さねこんころ」が「明日」の意味であることは、既に論証した通りである。だとすれば、「雪」は当然に落花の比喩である。

こういう言葉はないが、信玄の歌人としての器量はまことに大きく、「歌人さね」という辞書にない言葉を、信玄に献上したくなるほどだ。

10 おわりに

恵林寺に武田信玄の自筆色紙が伝わる「誘引すはくやしからましさくら花実こころは雪のふるてら」という和歌一首を、詳しく鑑賞してきた。

『伊勢物語』がこの和歌の中核（＝実）だった。特に、第十七段の落花の歌と、「さね・がね」を含む三つ言葉が、『伊勢物語』にはあつたことが重要である。「さねこん」を「実こん」と漢字で表記したのは、『伊勢物語』の世界が信玄の心に浮かんでいたからである。

『伊勢物語』を愛し、その世界を自家薬籠中のものとした信玄は、それに加え「誘引」という『和漢朗詠集』の漢詩、「さねこん」という『源氏物語』の薄雲巻に見られる催馬楽の言葉まで織り込んで、巧みに当座の和歌を詠み上げた。

その和歌は、信玄が「真実の国守」になるにふさわしい器量を、師である快川和尚に対して見せつけるものだった。

同席した一座の人々は、信玄の器量の大きさを喜び、これからの甲斐国のますますの発展と恵林寺の永遠を確信して、花の宴に興じたのだった。

A Study of *Tanka* Poetry of TAKEDA Shingen — A Song of Cherry Blossoms —

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

TAKEDA Shingen (武田信玄; 1521 ~ 73) was a renowned *daimyō* (feudal lord) who governed Kai (甲斐) and Shinano (信濃) Provinces. As well as a military tactician, he was a man of letters. Shingen studied *tanka* poetry (和歌) because he aspired to hold both “the pen and the sword (文武二道).” His poem calligraphed on colored paper (色紙) is treasured in the Erin-ji Temple (恵林寺) even now. The poem reads as follows:

sasowa-zu wa	誘引ずは
kuyashikara-mashi	くやしからまし
sakura-bana	さくら花
sane-kon koro wa	実こんころは
yuki no furu tera	雪のふるてら

It is noteworthy that Shingen employed Chinese characters 誘引 and 実 in writing さそふ (to invite) and さね (really) respectively. By so doing, Shingen hinted at allusions to *Wakan rōei-shū* (和漢朗詠集), *Genji monogatari* (源氏物語), and *Ise monogatari* (伊勢物語).

This paper argues that Shingen’s *tanka* poem can be interpreted as a self-praise of his being a master of both “the pen and the sword.”

Keywords: 武田信玄, 恵林寺, 和歌, 和漢朗詠集, 源氏物語, 伊勢物語, 実こん